

# 飛驒川流域地方における食生活調査（第Ⅲ報）

「ほう葉」の利用とその推移

熊沢昭子・北川公子・鵜飼美恵子  
鈴木妃佐子・仲 美恵子

## Investigation on the Food in the Basin of River Hida (Part 3) On the Utilization of “Hōba” and its Transmission

by

A. KUMAZAWA, K. KITAGAWA, M. UKAI  
H. SUZUKI and M. NAKA

### はじめに

飛驒川流域資源調査の一環として、私ともは食生活の面から「ほう葉」との関連をとらえ、第Ⅰ報において当地方の特徴ある様式を示した。

第Ⅱ報においては、飛驒川上流域地方の食生活における「ほう葉」の利用状況とその推移について報告した。

本報では、さらに流域を拡大してこの問題を追求し、流域全体からみた共通性および特異性についてのべる。

### 方 法

#### 調査地区の概況

調査地区は、飛驒川の上流域に位置する岐阜県大野郡の東部地方、中流域の益田郡、それより下って加茂郡、木曾川と合流する地点の美濃加茂市である。

なお、分水嶺宮峠から北流する宮川沿いに吉城郡、高山市を選びこれを対象地域とした。

#### 調査期日および調査方法

- 第1回調査 昭和42年7月下旬
- 第2回調査 昭和42年9月中旬
- 第3回調査 昭和43年7月中旬
- 第4回調査 昭和43年8月上旬
- 第5回調査 昭和43年9月中旬

第1回調査は主として飛驒川中流地域に位置する益田郡の萩原町、馬瀬村、小坂町、金山町、および加茂郡の白川町、東白川村の老人のいる世帯を訪問して、ききとり調査を行った。

第2回調査は、第1回調査で得た資料をもとに調査用紙を作成し、老人対象の調査を行った。なお配布、回収は調査地区の小学校児童をとおした。

第3回および第4回調査は、吉城郡の宮川村、神岡町、古川町、国府町および美濃加茂市、加茂郡の七宗村、川辺町について老人対象に訪問ききとり調査を行った。

郡名	市	町	村名	面積 km <sup>2</sup>	人口	世帯数
	高	山	市	140.47	53,274	14,425
	美濃	加茂	市	75.81	33,982	7,828
吉 城 郡	宮	川	村	196.90	2,341	530
	神	岡	町	312.34	22,535	5,896
	古	川	町	98.11	15,047	3,616
	国	府	町	89.22	6,252	1,385
大 野 郡	久々	野	町	107.71	5,247	1,146
	朝	日	村	186.61	3,122	721
	高	根	村	220.72	2,450	662
	高	見	村	358.68	3,215	720
益 田 郡	萩	原	町	143.30	10,811	2,525
	馬	瀬	村	97.28	2,203	525
	小	坂	町	245.99	5,810	1,430
	下	呂	町	193.31	16,155	4,315
加 茂 郡	金	山	町	167.76	10,902	2,667
	白	川	町	238.00	14,732	3,351
	東	白	川	87.18	4,026	973
	七	宗	村	90.90	7,151	1,572
	川	辺	町	40.70	9,724	2,177

岐阜県企画部統計課「統苑」1968年11月号による。

第1表 調査地区および概況

第5回調査は、ききとり調査で得た資料をもとに調査用紙を作成し、第3回、第4回の調査地区について第2回と同様に調査した

### 結果および考察

過去から現在までの校区別利用状況

「ほう葉」の用途別については次のように分類した。<sup>1)</sup>

- I つつみ紙のように
- II 皿，しきもののように
- III ふたやおおいのかわりに
- IV 料理につかう

60才以上の老人か今までに「ほう葉」を上記のように使ったことがあると回答したものをとりあけて校区別にまとめたものが第2表である

よく利用されているのはいずれの手法においても大野郡で、やや少ないのが吉城郡および高山市であり、ついで益田郡である。加茂郡の利用状況は少なく、美濃加茂市ではほとんど利用されていないことが認められた。

さらに用途別にみれば吉城郡、高山市、大野郡では、いずれの手法もよく利用されているも

地区	吉 城 郡		高山市		大 野 郡						益 田 郡		加 茂 市				美濃 加茂市																				
	宮川村	神岡町	古川町	国府町	北	東	久々野	大西	朝日	朝日	朝日	朝日	高根	高根	清見	宮村		山	萩原	小坂	小坂	馬瀬	金山	下原	上原	下呂	白川	東白	七宗	川辺	川辺						
例数	26	29	27	115	120	24	87	53	72	41	22	37	30	25	40	27	61	28	129	58	91	51	74	21	180	56	46	65	29	60	46	135					
仏事・神事・報恩講・婚礼などの菜をつつむ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+				
つみ、買物のとき、あげ、とうふ、納豆などをつつむ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
魚をつつむ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		
つけものをつつむ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
おやつ、べんとうをのせる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
皿の焼き魚をのせる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
仏事の供えものをのせる	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
しぎもの	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ふのかやわおりに	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
料理にか	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

80%以上が使ったと答えたもの 50%以上が使ったと答えたもの 30%以上が使ったと答えたもの 未調査

第2表 「ほろ葉」の過去から現在までの校区別利用状況



の「ほう葉ずし」はまったくみられない。

益田郡においては、「おやつ・べんとうをのせる」「仏事・神前の供えものをのせる」というようなつかい方はみられない。「ほう葉ずし」は吉城郡，高山市，大野郡では作られていないのに反し，この地域では非常に多く作られていることが特徴としてあげられる。

加茂郡では「ほう葉」のつかわれ方が少ないか，「ほう葉もち」は比較的良好に作られている。しかし上佐見，越原校区は加茂郡でありながらむしろ益田郡に似たつかい方をしていることが認められる。

#### 現時点における校區別利用状況

現在においてもつかっていると答えたもの，すなわち現時点における「ほう葉」利用の状況を校區別にまとめたものが第3表である。

過去にくらべて現在は調査地区全域ともかなり減少しているか，過去によくつかわれていた大野郡，吉城郡，高山市では現在でも比較的多くつかわれており，ついで益田郡である。加茂郡ではやはり少ない。

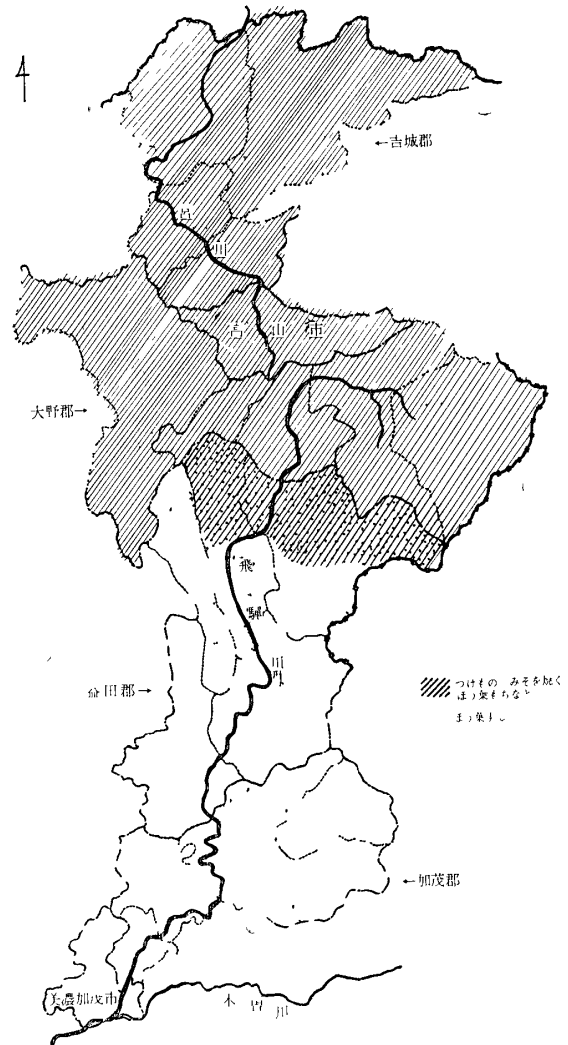
用途別にみると過去においては「ほう葉」のつかい方のいずれの項目も回答者の過半数かつかつたと答えているか，現時点において残されているのは「料理につかう」のか一番多く，ついで「ふたやおおいのかわりに」である。また「皿，しきもののように」の中の「焼き魚をのせる」ことは，加茂郡をのそいで他の地域では現在でもかなり用いられている。「料理につかう」もののうち吉城郡，高山市，大野郡では「つけものを焼く」「みそを焼く」「ほう葉もち」であり，益田郡および加茂郡の上佐見，越原校区では「ほう葉ずし」があげられる。過去，現在ともに「ほう葉」の使用率の少ない加茂郡ではあるが，「ほう葉もち」のみは現在もなお回答者の過半数の家庭で作られているのは，この郡の特徴である。<sup>2)</sup>

以上「ほう葉」のつかい方について上流域地方についてはすでに第Ⅱ報でのべたところであるが今回，全流域を通してみた場合にも同傾向が認められた。すなわち日常の食生活に手軽に用いられるものは減少の傾向が強く，料理に使用することは現在もなおよく行われていることが認められた。

#### 「ほう葉」の使用方法からみた分布

第1図に示すとおりである。

上流域地方の特徴である「つけものを焼く」「みそを焼く」「ほう葉もち」がよく作られており中流域地方の特徴である「ほう葉ずし」もまたよく作られているのは山の口，小坂，湯屋校



第1図 飛騨地方のすしの分布



区である。したがってこの地域を「ほう葉」の使用法の別からみた接点とみることできよう。

#### 「ほう葉」利用の年代推移

過去においてよく使用された「ほう葉」が現在にいたる過程でどのような推移を経てきたかをまとめたものが第4表である。

「明治末まで」「大正末まで」「終戦直後まで」「現在も」の4年代にわけて集計した。現在もよく利用されているものをのそいてほとんどか終戦を境に減少している。このことは今回地域を拡大して全流域についてみた場合においても第Ⅱ報<sup>2)</sup>でのへたと同様の結果が認められた。

### 要 約

飛騨地方の食生活の一面を明らかにする上から、この地方の特色と思われる「ほう葉」使用に着目し、「ほう葉」の利用状況とその年代推移について前報にひき続き地域を拡大して全流域にわたって調査した。

過去から現在にいたるまでにもっとも「ほう葉」をよく利用しているのは大野郡、やや多いのか対照地域として選んだ吉城郡および高山市、ついで益田郡、加茂郡と飛騨川を下るにつれて減少し、美濃加茂市ではほとんど利用されていないことが認められた。

これらのことは現時点においても同傾向にある。

「ほう葉」の用途別からみれば飛騨川上流域地方ではより素朴で実利的なつかい方をしているのに対し、中流域地方では実利の面はうすれ「ほう葉すし」のように色と香りをよく生かした美的、趣味的なつかわれ方が多く残されている。

「ほう葉」の実利的な使用法と趣味的な使用法との分布の接点となる地域は、中流域の山の口、小坂、湯屋校区であると認められた。

「ほう葉」利用状況を年代推移の上からみれば、終戦を境としていちじるしく減少していることが認められた。

調査にあたり、種々のご便宜をおはからいいただいた岐阜県教育委員会社会教育課の諸氏ならひに調査対象校の諸先生に深謝申し上げる。なお調査・集計にご協力いただいた岩瀬幸子嬢に謝意を表する次第である。

### 参 考 文 献

- 1) 仲美恵子他：(1967) 飛騨川流域地方における食生活調査 (第Ⅰ報)、「ほう葉」との関連について、名古屋女子大学紀要 第13号
- 2) 鈴木妃佐子：(1967) 飛騨川流域地方における食生活調査 (第Ⅱ報)「ほう葉」の利用状況とその推移、名古屋女子大学紀要 第13号